

青年期の社会化に関する一考察

工 藤 保 則

本稿は、10歳を起点として、その後の中学生・高校生の社会化を、ライフコース論的に捉えようとしたものである。その際、分析の枠組みとしては地域特性（都市/地方）による比較を用い、分析の方法としては計量社会学的な方法を用いたのだが、その結果、「子どもは、自覚的・主体的なライフコースを送るようになる10歳より前までは、都市/地方という地域特性によっては、その社会化の様相はそう大きくは変わらない。が、青年期にあたる中学生・高校生においては、その社会化に地域特性が大きく影響する」という知見が得られた。

キーワード：都市と地方、ライフコース、人間行為力

1. 研究の目的と構成

本研究は、中学生と高校生を、その前後との関係を含めて、社会的に位置づけることを目的としたものである。位置づける際の観点もいろいろあるだろうが、ここでは「社会化」という観点からそれを行うことにする。

社会化とは、社会学における最も主要な研究テーマのひとつであり、『新社会学辞典』には「個人が他者との相互作用のなかで、彼が生活する社会、あるいは将来生活しようとする社会に、適切に参加することが可能となるような価値や知識や技能や行動を習得する過程。諸個人がこうした社会化の過程を経て、一定の価値、知識、技能、行動などを学習することによって、社会の存続は可能になる。（後略）」（森岡他編1993:596）と定義されている。それを筆者なりにまとめると「自分以外のもの—つまり社会—を取り入れ、解釈し、適応（時には反発）する、一種の自己実現のプロセス」というものになる。そして、その社会化といった場合、これまでは、まず子どもの社会化が扱われることが多かった。また、成人における職業的社会的社会化も扱われることも多い。最近では、中高年の社会的社会化研究もされている。その間であまり注目を集めず、忘れられているかのようにになっているが、中学生・高校生の社会的社会化ではないだろうか。

そもそも、中学生や高校生に関しての社会的学的研究は、あまり多くはない。そのことからすると、中学生・高校生の社会的社会化研究が多くないのも、もっともなことかもしれない。社会学では、人生を〇〇期としてくくって捉えることはこれまではあまり行われず、役割移行や役割順序として捉えることが優先されてきた。考えてみれば、中学生・高校生は「子ども役割」や「生徒役割」で一定し、役割移行や役割順序がない時である。従って、社会的学的な研究、特に社会的社会化のような個人と社会のかかわりについての研究が、それほど、行われていないのも、ある意味、当然かもしれない。

一方で、中学生・高校生という時は、心理学では最も注目される時期のひとつである。E・エリクソンは精神分析的な視野に立ち、また人類学的なフィールドワークを行うことから「人生の8

段階」説をとらえた (Erikson1950)。エリクソン以降、青年期についての発達心理学的な研究はいつそうさかんになり、心理学的移行とかかわってのアイデンティティ研究が多くされている。

このように、中学生・高校生という時期は、心理学的研究は多くされているが、社会学的研究はそう多くはされていないという、ある意味、とても興味ぶかい時期である。そこで、筆者は、青年期研究において、心理学と社会学の研究の蓄積の不釣り合いによる隔たりを多少なりとも埋め、さらに社会学的な青年期理解を深めたいとの考えから、数年にわたり、本研究に取り組んできた。

上記したような目的を持つ本研究の分析モデルは次のようなものである。

「10歳を起点として、その後の中学生・高校生の社会化を、ライフコース論的に捉える。その際、分析の枠組みとしては地域特性（都市/地方）による比較を用い、分析の方法としては計量社会学的な方法を用いる」。

2. 研究の視点と方法

1 節で本研究の分析モデルとして述べた

「10歳を起点として、その後の中学生・高校生の社会化を、ライフコース論的に捉える。その際、分析の枠組みとしては地域特性（都市/地方）による比較を用い、分析の方法としては計量社会学的な方法を用いる」

には、本研究における、対象・視点・方法が示されている。それはそれぞれ「10歳を起点として、その後の中学生・高校生」、「ライフコース」、「地域特性」、「計量」になるだろう。以下、それらについて述べる。

1) 本研究の対象

本研究における中心的な研究対象とは、もちろん中学生・高校生であるが、まずはその存在を現代社会の特徴の中から捉えてみたい。

現代社会に関する最近の研究では、中学生・高校生ではなく、それ以降である18～35歳くらいを対象としたものが多い。すぐ思い浮かぶのは、ニートやフリーターを扱ったものや、また、その背後に横たわる、格差や不平等に関する研究である¹⁾。これら社会変動にも関する研究は、中学生・高校生より上の18～35歳くらいの、いわゆるポスト青年期を対象とした研究から説明されることが多い。が、私たちは、いっぺんに、そして急にその年齢段階に入るのではない。その前に中学生・高校生という期間があり、そこにおいて上述したような現代社会に特徴的な像が投げかけられ、かれらはそれを受け止めているのである。つまり、中学生・高校生は、自身の問題として、社会変動を、それほど直接には体験していないが、間接的に肌で感じている存在ということができるだろう。

その中学生・高校生は、これまで社会学研究においてどのように扱われてきたのであろう。過去の研究をふりかえったところ、中学生（時代）と高校生（時代）を連続的に捉えようとしたものは、ほとんどみあたらなかった。つまり、これまでは、中学生と高校生は、別々に扱われてきたのであり、またその扱われる際の問題や課題も違っていたのである。また、過去の研究からは、中学生、特に地方の中学生は、社会的関心を集めることが少ない存在のように思われたが、高校生は中学生ほど少なくはないようであった。最近の代表的な研究としては、地方高校生を対象とした樋田他編（2000）、都市高校生を対象とした尾嶋編（2001）をあげることができるだろう。

どちらも学校階層や社会階層等の構造的な視点からの研究であり、社会の入り口に立つ存在としての高校生の姿が描かれているが、その地域特性をふまえての議論はほとんどされていない²⁾。

考えてみれば、先に述べたような現代社会の諸相は、そのまま中学生・高校生に投げかけられるのではない。それぞれが生活する「都市」と「地方」において、その地域の特性と重なったかたちで、中学生・高校生に投げかけられるものである。中学生・高校生は、地域を通して、また地域の中で、それを受け止め、それに対応する存在といえるだろう。なお、地域特性としての「都市」と「地方」を研究の視点として取り入れる意味については、次項でも述べる。

2) 研究の視点

中学生・高校生はこれまでそれぞれ別々に扱われることが多かったが、本研究では、別々にではなく、時間的な連続性の下で、つまりひとつのコースとして捉えたい。そのために、ライフコース論という視点をを用いる。

ライフコースとは、その研究の代表的人物であるグレン・H・エルダー・Jrによれば、「個人が年齢別の役割や出来事を経つつ巡る人生行路」(Elder1981:509)と定義される。この定義とも関連し、またその代表的な研究を見ればわかるのだが、社会学的なライフコース研究は、その対象者が振り返る若者時代は、当然、含まれるが、本研究の対象とする中学生・高校生等の若者を対象とすることは極めて少なく、成人から中高年を対象としたものが多い³⁾。心理学的なライフコース研究の代表ともいわれるD・レビンソンの発達モデルにおいても、児童期と青年期はモデルの前段階とされ、ほとんど注目されないことも同様なことであろう。

対象のことは別として、ライフコースは社会的文化的な要因からなっていることには間違いはない。では、どのような社会文化的形成要因がライフコースを形づくっているだろうか。エルダーはそれを、・年齢別役割、・他者との相互作用、・人間行為力 (human agency)、・歴史的出来事ないし時代背景、の4つに分類しているが、安藤由美はさらに整理し、外部的要因 (時代背景)、他者 (年齢別役割、他者との相互作用)、人間行為力、の3つにまとめなおし、「人生の過程は、外部的要因や他者、人間行為力によってもたらされる」(安藤2003:27)といている。

さて、前述したように、ライフコース研究は中高年の一生をみる研究が多いようであるが、ライフコースという視点は中高年に対してだけ用いられる視点なのだろうか。若者にとっても、それまでの人生の過程はひとつの立派なライフコースとしてみることも可能ではないだろうか。そして、その中の、それなりの意味を持つ期間として、中学生・高校生という時期は、ひとつの対象として研究がされてもよいのではないだろうか。そうでなければ、ライフコース論は対象を限定するものになってしまうだろう。そこで、本研究では、ライフコース研究において、若者が研究されていないという期間の空白を埋めるということだけを目的にするのではなく、安藤のいう、「外部的要因」「他者」「人間行為力」というライフコースの構成要素を中学生・高校生にあてはめ、実際に検討してみることを通して、ライフコースという視点が若者においても有効なことを確認する。

以下、中学生・高校生にあてはめる際の視点を示す。

- 外部的要因・・・中高年を対象とした研究ではこれは「時代背景」として大きな意味を持つてくる要素であるが、中学生・高校生においては、時代背景は、現在の問題としては、まだそれほど意味を持ってないのではないだろうか。それよりも、外部的要因として大きな意味を持つのは、社会背景のように思われる。そして、その中でも特に、地域特性が大きな意味を持つよう

に思われる。本研究においては、中学生・高校生における外部的要因としての都市/地方という地域特性の有効性を捉えたい。

- 人間行為力・・・人間行為力とは、「個人の構築者としてのメカニズム」や「個人の発達や変化への働きかけ」をいうが、人間行為力というままでは理解しにくい。そのため、ライフコース研究では、人間行為力は、具体的にはセルフ・エフィカシー (self efficacy=自己効力感) やプランフル・コンピタンス (planful competence=自己有能感) という概念として具体的に研究されている。

セルフ・エフィカシーとは、アルバート・バンデューラが唱える概念であり、「ある結果を生み出すために必要な行動をどの程度うまく行うことができるかという個人の確信」(Bandura1995:41) のことである。それは、他者との関係の中に自分を位置づけることによって得られるものといえよう。よって、セルフ・エフィカシーとは、自分と外部における他人、つまり、自分以外の人、との関係において成り立つ概念と考えることができるだろう。

プランフル・コンピタンスとは、クローセンの概念であり、「自分に対する自信、知的投下といったパーソナリティ特性」を成分とする (Clausen1991:811)。クローセンの研究によれば、高いコンピタンスによってライフコース上で賢い選択をした人は、後の人生においてもその選択に対して高い満足度を維持するということであった。個人の主体的・能動的特質であるこれは、ライフコースの連続性にもかかわるものであり、それは自分と自分の内部のもうひとりの自分との関係における概念であるので、こちらは自分と自分の内部における他者との関係において成り立つ概念といえよう。

「自己」や「他者」の概念にかかわるセルフ・エフィカシーやプランフル・コンピタンスとして具体的にあらわされる人間行為力については、3節6項で「ライフコースと社会化」との関係を考える中でもう一度くわしくふれることにする。

- 他者・・・これについては、次項において述べる。

3) 研究の方法

社会化を計量的に捉える時、本研究においてその「捉える」ものは主に、社会化における「(重要な) 他者」の存在とそのはたす役割である。

現代社会では他者との関係性の変容が話題になることが多いが、本研究では、変容のおこっている中で、これら具体的な他者の存在とその他者との相互作用のはたす役割・意味、特に社会化におけるそれ、をあらためて考えてみたいと思う。その際、捉え方として、関係性の変容する中で関係を捉える際に有効と考えられる、パーソナル・ネットワーク論的方法を用いることにする。パーソナル・ネットワーク論は、最近、都市社会学や家族社会学等において用いられることが多い視点であり、文字どおり、個人がどのような人間関係を取り結んでいるのかに注目するものである。また、それは、個人の主体的な他者とのかかわりを明らかにし、同時に、その他者とのかかわりを個人の資源として捉えるものでもある。個人化・多様化が進む現代社会において、個人を分析単位とするこの視点は、社会化における「(重要な) 他者」の存在とそのはたす役割を捉える際に有効な視点のひとつといえるだろう。

パーソナル・ネットワークはライフコース論においても用いられるものであるが、それを測定する方法はいまだ確定されているとはいえない。今回、3節3項～5項で用いるネットワークに関する質問項目をつくる際に参考としたのは1985年版General Social Survey のネットワーク質

問群である。作成した具体的な質問項目は、次のようになっている。まず、被調査者である中学3年生、高校3年生にとって「過去半年の間に、重要なことを話し合った人」を「思い浮かぶ順」に「3人まで」あげてもらい、それぞれについてそのあげられた人物の「間柄」と「性別」を尋ねている。そのうえで、被調査者とそのあげられた人物との「接触頻度」（以下「頻度」とする）、「接触期間」（以下「期間」とする）、「(主観的な) 親密さ」（以下「親密」とする）を尋ねている。

社会化研究においては、これまでは理論的な研究が主であり、実証的なものはあまりされていない。実証的な研究がされる場合も、質的な研究はされるが、計量的にアプローチされることはあまりなかった。その意味で、本研究におけるこの方法は、計量的な社会化研究の可能性を探るものでもある。

3. 青年期を対象とした計量的分析

本節では、2節で示した視点と方法に基づいて行った、工藤（1998, 2001, 2003, 2004, 2005, 2006）について、その要約を示す。

1) 起点としての10歳

①関心・調査対象：10歳前後の子どもの直面する課題

工藤（1998）では、中学生・高校生を対象としてその社会化について研究する際の、「起点」としての10歳について考察した。

10歳前後の子どもにおこる変化—それは先行研究の検討から「抽象性」に関するものと考えられた—を具体的に捉えるために、現代の米国を代表する社会学者であるN・K・デンジンの子どもの社会化論も参考にして、子どもの遊びに関する質問紙調査を行った。調査は、兵庫県神戸市の住宅地に位置する公立小学校3校の協力を得て、その3校の3年生209人、4年生237人、5年生175人、6年生186人の児童を対象として1994年10月初旬に行った。

②分析：子どもの遊びと抽象的思考

子どもの遊びを、抽象的思考の必要度、つまり「一般化された他者」を必要とする度合いから分類・ウエイト付けし、それを使って、3～6年生の遊びの実態を捉えようとした。その結果、抽象的思考の必要度の高い遊びを日常的に行うという点では、4年生（10歳）がひとつのピークであることがとらえられた。

③知見：関係性の転換点としての10歳

今まで社会的に扱われることはほとんどなかった10歳前後の子どもに注目し、かれらの姿を社会的パースペクティブから捉えようとしたところ、次のような知見が得られた。

- 10歳前後の子どもを対象とした教育学、心理学、人類学での研究から、その頃に「抽象性」にかかわる課題が子どもの中に発生していることが理解できる。
- 社会的に子どもに接近しようとする時、「抽象性」を手がかりに考えると、10歳前後の頃に他者との関係性にかかわる課題が存在することが理解できる。
- 子どもは、10歳以前（3年生以前）は具体性だけの世界に住み、そこはまだ「一般化された他者」の概念からは遠い。10歳（4年生）の頃、具体性だけの世界から抽象性を含んだ世界に入り始め、10歳以後（5年生、6年生）に抽象性の世界に入る。そこでは、「一般化された他者」の概念を獲得し、その「社会的自我」を伸張させる。つまり、10歳前後の頃というのは子どもにとっ

て、決して小さくない転機であり、その時を境にして、それ以前と以後とでは、他者との関係性、そして社会—本研究においては、特に地域—とのかかわりが違ってくる。

これらからすると、10歳以前は、極端に言えば、親、きょうだい、遊び仲間といった重要な他者との具体的な関係がほとんどであり、抽象的な存在としての、社会—本研究においては、それは特に地域となるだろう—との関係はあまり大きくないと思われる。それが、関係性の転換点である10歳をはさんで、10歳以後になると、重要な他者だけでなく、一般化された他者ともかかわるようになり、それらが同時に並列的に存在する中で、それらとの関係において自分のことを意識するようになる。それは、「社会的な存在」としての自分の質が変化したということであろう。

2) 都市と地方の中学生

①関心・調査対象：中学生という存在

中学生という存在は、これまで社会的にはあまり注目されてこなかった。かれらは内面的には問題を抱えていることもあるのだろうが、外面的にはおおむね安定しているように受け取られていた。2節と3節1項の記述からすると、中学生は、その安定した状態において、社会との関係の中で自覚的なライフコースを歩み始める時期とも考えられる。

その社会との関係という時、中学生にとって最もかかわりのあるものは、おそらく、自らが生活する地域であろう。考えてみれば、その頃は、小学校区という具体的な地域から離れ、ある程度、抽象化、一般化される、地域の中に入っていく時期でもある。そこで工藤・阿形・山根(2004)では、その地域と中学生の関係について考察するために、都市/地方という地域特性から中学生にアプローチした。

都市/地方という地域特性の中で中学生を実証的に捉えるために、2001年12月～2002年1月に、愛知県名古屋市と福井県武生市の中学生を対象とした質問紙調査を行った。有効票は、名古屋市788票、武生市620票であった。

②分析：中学生の「現在」と「将来」

調査の分析において、まず、調査項目の中の「現在の成績」「中学卒業後の進路希望」「高校卒業後の進路希望」「仕事観(含「性別役割分業」「結婚後の仕事」)」という4つの項目を重ねることで、名古屋(都市)と武生(地方)の中学生の「現在」と「将来」について考えた。それに続いて、中学生の「将来」にも大きくかかわってくるかれらの「職業意識」について、「将来つきたい仕事」「職業観・進路観」「資格観」という項目から検討した。

③知見：地域特性と中学生の意識

上記した7つの項目から、名古屋(都市)と武生(地方)の中学生の「現在」の状況と「将来」展望について検討した結果、以下のような知見が得られた。

- 名古屋(都市)の中学生は、認識としての「現在」の成績の分化は小さいが、希望としての「将来」の生活観は分化する。
- 武生(地方)の中学生は、認識としての「現在」の成績の分化はあるが、希望としての「将来」の生活観はあまり分化しない。
- 将来のことでもある「職業意識」については、名古屋(都市)の中学生は、つきたい仕事は明確ではない者が多いが、明確な者の中ではつきたい職業の多様性が認められる。また、職業観については、相対的に「職業忌避感」が強く、「一生の仕事志向」が弱い。
- 武生(地方)の中学生は、名古屋と比べるとつきたい仕事は明確である者が多いが、明確な者

の中ではつきたい職業の多様性が名古屋ほどはみられない。また、職業観については、相対的に「職業忌避感」が弱く、「一生の仕事志向」が強い。

○これらの名古屋（都市）と武生（地方）の違いは、地域特性の違いとその内面化の違いと考えることができる。そして、これらは従来の「学歴社会論」が指し示す内容とは矛盾し、名古屋（都市）と武生（地方）の両地域とも「現在」と「将来」が単純にはつながらない。

ここで得られた知見は、名古屋（都市）と武生（地方）の地域特性の違い、そしてその内面化の違いと考えることができる。また、ここまでみてきたことから、両地域の中学生の思い描く人生展望は異なることが理解できるが、同時に、かれらのこれから歩む人生も異なってくるだろうと予測することもできる。そこで次項からは、現在と将来の間に位置する生徒たちの姿について、都市/地方という地域特性により焦点を合わせ、またそれに「人」の観点もくわえて考えていくことにする。

3) 中学生の相談ネットワークと社会化

①関心・調査対象：中学生の人間関係

本項では、前項でみてきた都市/地方の地域特性によるものにくわえ、中学生を取りまく「人」の面に注目して、それによってかれらの意識がどう形成されるのかについて考える。

中学生は、主に家族集団と学校集団という2つの集団の中にくらしている。前者には、父、母、きょうだい、祖父母等が存在し、後者には、友だちや先生が存在するだろう。集団の中にくらしているが、当然のことながら、中学生は集団と関係を結んでいるのではなく、集団を構成する人たちと個別に関係を結んでいるのである。けれども、集団の中の、誰と、どれほど、どのようにつきあっているかという、その実際のところはあまり知られてはいない。時に、特別な事例についての記述はされることはあっても、いわゆる「ふつう」の関係となると、かえりみられることはあまりないようである。そこで、工藤（2005）では中学生の取り結んでいる人間関係をみることを通して、かれらの姿に接近しようと試みた。

中学生の人間関係を具体的に捉えた上で、さらにそれを発展させるために、本項ではパーソナル・ネットワークを手がかりとする。その際のデータは、前項に引き続き、都市と地方を代表させる愛知県名古屋市と福井県武生市の中学生を対象とした調査のそれを用いる。

②分析：ネットワーク分析

都市と地方において、中学生が取り結ぶネットワークの構造を確認し、その後、ネットワークが意識形成に対して持つ機能を明らかにする。「意識形成」については、「関係性」という観点から対象に接近するために、その手がかりとして「ウィークタイ（強い紐帯）／ストロングタイ（弱い紐帯）」の視点を取り入れる。

本項～5項で使用するデータにおいては、あげられた相手との関係の持ち方として、「ストロングタイ」からなる関係性と「ウィークタイ」からなる関係性という相対的な2つの関係性を設定することができるだろう。その際、本項と次項では、相手との「接触頻度」（以下「頻度」とする）と「(主観的な)親密さ」（以下「親密」とする）の2要素を使ってタイの強さ／弱さをはかっていることから、前者はパーソナル・ネットワークが「日常的に強く交わる親しい他者（達）」（以下「関係の強い他者」とする）から構成される生徒といえ、後者はパーソナル・ネットワークが「日常的にはあまり交わらないそれほど親しくない他者（達）」（以下「関係の弱い他者」とする）から構成される生徒といえるだろう。

この視点は、M・グラノヴェターの研究を応用しようとするものである。そこで確認しておきたいのだが、グラノヴェターはタイの強さを「時間量、親密さ、情緒的強さ、相互性の結合」で表している。その際、鹿又伸夫もいうように「親密さ」情緒的強さ」は実質的に同じ内容を指すと考えられる。また、「相互性」については今回のデータの性格上、関係しないので考慮に入れなくてもよいだろう。とすると、タイの強さをはかる要素として、グラノヴェターの定義における「時間量」と「親密さ」が残ることになる。今回のデータでは「時間量」に関係するものとして「頻度」と「期間」の値を得ているが、ここでは「頻度」によって「時間量」を代表させ、それと「親密」との2要素をもってタイを構成する要素と考えることにする。なお、各要素においては得られた3人分の得点を合算している。

③知見：中学生の社会化

家族集団や学校集団から中学生にアプローチするのは別の方法として、生徒それぞれの取り結ぶ「関係性」から中学生にアプローチした本項では、次のような知見が得られた。

- 「家族・親族」と「(友人等の) 関係の強い他者」は、どちらも社会化の主体であるが、その機能が客体において発揮される時制が異なる。「家族・親族」は現在の社会化の主体と考えられ、「(友人等の) 関係の強い他者」は予期的な社会化の主体と考えられる。このことは、地域の別にかかわらない。
- 「(友人等の) 関係の強い他者」が主体となる予期的な社会化では、地域の別によって、その意識の分化程度が違ってくる。名古屋（都市）では、今日的な職業意識を持つようになるが、武生（地方）ではそこまでの分化はない。

これらから、他者の社会化においてはたす機能が、名古屋（都市）と武生（地方）では少し違ってきていることが読みとれる。

社会化における重要なトピックのひとつと思われる中学生の社会化だが、実際のところそれは、それほど注目されてきたわけではない。この頃になると、社会化の重要な主体のひとつである家族員との関係は、子ども期ほどの注目は集めなくなる。また、学校の社会化機能は考察されることはあるが、それはあくまで集団としての学校であり、その構成員である生徒には関心はあまり払われないようである。けれども本項でみてきたように、それまでの子ども期における重要な他者である家族員や、中学生にとっての学校の構成員といえる友だちは、この時期においてもそれまでとかわらず重要な社会化の主体なのである。

4) 都市の高校生の相談ネットワークと社会化

①関心・調査対象・分析：都市の高校生という存在

高校生はどういった人たちと交わり、また、その人たちからどういった影響を受けているのだろうか。工藤（2001）では、都市の高校生を取りまく人たちとかれらとの「関係」について考察した。

ここでの分析のもとになる調査は、兵庫県神戸市と阪神間の高校3年生を対象として1997年6月～7月に実施したものである。この調査は職業校を含む13校で行われ、そのうち、11校が公立、2校が私立の学校である。最終的な有効回収票は2397票である⁴⁾。

なお、分析は前項と同じネットワーク分析を行った。

②知見：都市の高校生の社会化

都市においては学校の意味が変化したと思われる現在、そこでの高校生の社会化について考え

る時、「関係性」はひとつの手がかりとなる。この考えに基づいて行った分析の結果から次のような知見を得ることができた。

- 都市では「集団としての学校」の比重の低下がある。
- 『家族・親族』に相談する生徒ほど高校生活に適応的な意識を有する傾向があり、『関係の弱い他者』に相談する生徒ほど高校生活において適応的な意識を有さない傾向がある。
- 『(友人等の) 関係の強い他者』に相談する生徒ほど従来の「職業生活」観を有する傾向があり、『関係の弱い他者』に相談する生徒ほど今日的な「職業生活」観を有する傾向がある。
- 「家族・親族」は現在での社会化の主体、「(友人等の) 関係の強い他者」は予期的な社会化の主体と考えられた。

パーソナル・ネットワークを手がかりとしながら、計量的に都市の高校生という対象にアプローチした工藤(2001)では、かれらの人間関係や生活について、その一端をかいまみることができた。パーソナル・ネットワークは高校生の生活構造の重要な部分をしめ、制度的な枠をこえて、個人のパーソナリティ形成に少なからぬ影響を持っているのである。

5) 地方の高校生の相談ネットワークと社会化

①関心・調査対象：地方の高校生という存在

地方の高校生は、前項でみた都市の高校生とは違うところが多くあるように思う。そのうちの大きなひとつは、トラッキングに関してのものである。周知のように、トラッキング理論とは、学校タイプによる経路分化を説明する理論であると同時に、それによるパーソナリティや価値観の分化を説明する社会化論である。

工藤(2006)では地方の高校のトラッキングについて、それをより意識的に捉えるために、都市の高校のそれとのヨコの比較を試みた。その際、「地方の高校生」と「都市の高校生」を対象とした2つの調査データを用いた計量分析を行った。

「地方高校生調査」は福井市にある、高等教育進学率/就職率から層をなすとも考えられる、タイプの異なる県立高校3校を対象として2001年10月～11月に実施した。各校における有効票はそれぞれ、92票、161票、155票であった。

「都市高校生調査」は、前項で用いたものである。この調査は職業校を含む13校で行われたのだが、ここでは職業校をはずした10校のデータを使い、分析においてはその10校の中から「地方高校生調査」のものと学校タイプの的に似通っていると考えられる3校を分析対象校とした。それぞれにおける有効票は、143票、149票、209票となっている。

②分析：「学校タイプ」による分析と「相談ネットワーク」による分析

現在および現在までのトラックにかかわる「経路」と「パーソナリティ・価値観」についての、また、現在および現在から先のトラックにあたる「進路決定」「職業選択」項目についての、学校タイプによる分析をした。これら「集団」からの分析に続いて、「人」の側面からの分析として、ネットワーク分析(ここではそれを「関係性」ではなく「同世代/異世代」から捉えている)を行った。

③知見：地方の高校生の社会化

社会化研究のひとつであるトラッキング研究では、これまで制度的な側面からのアプローチが多く、パーソナルな側面からのアプローチはあまりされてこなかった。学校集団という制度にくわえ、相談ネットワークというパーソナルな側面からも検討した工藤(2006)では、以下のよう
な知見を得ることができた。

○地方では今でも学校が生活の中心になっている。

○高校3年生にとって現在および現在までのトラックである「経路」「パーソナリティ・価値観」は、あたかも一対であるかのようなかたちで、ともに学校タイプによって分化する。

○高校3年生にとって現在および現在から先のトラックである「進路決定・職業選択」は、学校タイプからはその特徴は捉えにくい。しかし、そこに相談ネットワークがくわわることにより、学校タイプにそった分化があらわれる（学校タイプにそったトラックを進ませる＝上位校では異世代（おとな）は進路決定における促進の主体、下位校では同世代（仲間）は職業選択における促進の主体、となる）。

これらの知見は、ネットワーク研究の対象となることが多い都市ではなく、その対象となることの少ない、そしてどちらかという制度が重きをなしていると思われる地方において、トラックにおける相談ネットワークの力を捉えたものである。そしてそれは、「現在まで」は学校タイプにより分化するが「現在から先」は学校タイプからは捉えにくいという状況にとまどう地方の高校3年生の、その状況への対応策や解決法の実際をあらわしているようにも思える。

6) 社会化とライフコース

①関心：中学生・高校生と人間行為力

3節2項から5項まで、都市と地方の中学生・高校生の社会化の諸相をみてきた。それらから、3節2項でみた地域特性を取り入れての中学生・高校生のライフコースについて考えていきたいのだが、各章でみてきた社会化の相を単純に並べて考察しただけではライフコースについての研究とはならないだろう。社会化とライフコースの関係について考察するために、ここでライフコースの社会文化形成要因のうち2節で残したままになっている人間行為力について考えてみたい。

人間行為力とは、2節でも示したが、「個人の構築者としてのメカニズム」や「個人の発達や変化への働きかけ」をいう。それについては、その具体的な力として、前章まででみてきたことでいえば、相談相手を選ぶという行為や地域特性の中に自分を位置づけるという行為等、多くのことがいえるだろうが、本研究においてはなによりも、異なる時点の自分を同一であるとして認める力が、最も重要なそれにあたると思われる。

これまで中学生・高校生をはじめとした若者は、ライフコース論的には研究の対象とされることは少なかったのだが、それは若者の人間行為力の存在があまり認識されていなかったためであろう。また、若者は、長く人生行路を歩んできた人たちとくらべると、人生の全行程がまだまだ短いため、その人間行為力の影響について考察することが難しかったためもあるだろう。

これも2節で述べたことだが、人間行為力というままでは抽象的にすぎることもあり、その力についての理解をすることは難しい。そのため、ライフコース研究においては、これまで、セルフ・エフィカシーやプランフル・コンピタンスという概念として、具体化して研究されてきている。そこで本節でもそのならいに従うことにして、本研究での文脈上にセルフ・エフィカシーとプランフル・コンピタンスを置いてみたいと思う。

また2節で述べたことの繰り返しになるが、セルフ・エフィカシーとは、「ある結果を生み出すために必要な行動をどの程度うまく行うことができるかという個人の確信」のことをいい、プランフル・コンピタンスとは「自分に対する自信、知的投下といったパーソナリティ特性」をいうことから、前者は、自分と自分以外の人との関係において成り立つ概念と考えられ、後者は、自分と自分の内部におけるもうひとりの自分との関係において成り立つ概念と考えられる。それは

どちらも、「自己」概念と「他者」概念の獲得によって生じるものであり、それぞれ「自立」性に基づく概念、「自律」性に基づく概念とすることができるだろう。とすると、プランフル・コンピタンスとセルフ・エフィカシーを媒介として考えると、人間行為力とは、「自己」概念と「他者」概念の明確な獲得によって生成する「自立」性と「自律」性に関連する力とすることができるだろう。

②分析：「自己」と「他者」の獲得過程

3節1項で用いた質問紙調査に含まれる子どもの遊びの中での関係性にかかわる項目を「関係性変数」と考え、それを使って「自立」性と「自律」性について捉えようと試みた(工藤1998)。

③知見：中学生・高校生の社会化とライフコース

「個人の構築者としてのメカニズム」や「個人の発達や変化への働きかけ」である「人間行為力」について検討した。その際、子どもの「自立」性と「自律」性についての検討をした工藤(1998)を参考にすると、その結果、次のようなことが考えられる。

○10歳を境としてそれ以後に、子どもは「自己」概念と「他者」概念を明確にし、「自立」性と「自律」性を獲得するようになる。それは、プランフル・コンピタンスとセルフ・エフィカシーの獲得、ひいては人間行為力の獲得を示すものである。人は人間行為力が備わることによって、各時点での社会化が個人の中でまとまって構築され、ひとつのライフコースとして捉えられるようになる。また、これらのことにより、本研究の対象である、10歳以後にある中学生・高校生の社会化は、連続的に捉えることが可能になると考えられる。

4. 総括

ここまでの各節で行った作業によって得られた知見をまとめて記述すると、次のようになるだろう。

子どもは、自覚的・主体的なライフコースを送るようになる10歳より前までは、都市/地方という地域特性によっては、その社会化の様相はそう大きくは違わない。が、青年期にあたる中学生・高校生においてはその社会化に地域特性が大きく影響するのである。

そういう状況において、都市の中学生は「現在」の成績分化は小さいが、おそらくその地域特性である仕事・働き方の多様性があることを反映してだろうが、「将来」の生活観—主に仕事・働き方—の分化は大きい。地方の中学生は「現在」の成績分化は大きい、これもまた、おそらく地域の仕事・働き方の多様性が少ないことを反映してだろうが、「将来」の生活観—主に仕事・働き方—の分化は小さい。これらは、従来の学歴社会論でいわれていることとは異なり、都市においても地方においても、「現在」と「将来」の分化の程度は一致せず、両者はそのまま直線的には結びつかない。

その直結していない、「現在」と「将来」の間に位置するのが、本研究の中心的な対象である中学生と高校生である。それらの、他者や学校集団をエージェントとした社会化について捉えるということは、単なる地域特性の影響という受動的なものではなく、他者や集団を通しての地域特性の取り入れ、解釈、適応(時には反発)という主体的な働きについて考えるということになる。

その観点からみれば、中学では、都市においても地方においても「家族・親族」は現在の社会化の主体である点は同じである。しかし、「(友人等の)関係の強い他者」が主体となる予期的な

社会化については、都市と地方では、少々、その様相が違ってくる。地方ではそれにより形成される意識は、都市において具体的な傾向がみられるようには、明確にはなっていない。というのも、地方では、その地域特性の内面化ともかかわる、仕事や働き方についてのリアリティが乏しいという現実があるからである。一方、都市は、仕事や働き方についての多様なリアリティ、そして選択可能性があり、またそのことも関係して、将来のことについてはまだ具体的に決めなくてよいという状況もあってか、「(友人等の) 関係の強い他者」によって導かれる予期的な意識もコンサマトリー的なものとなってくる。

この都市と地方の違いは、高校生になるとさらに明確になる。都市では中学の時と同様に、「家族・親族」が現在の社会化の主体、「(友人等の) 関係の強い他者」は予期的な社会化の主体であるが、「(友人等の) 関係の強い他者」により形成される職業意識は、中学時代とは異なり近代的なものに変わってくる。地方はというと、これまでの記述ではあまり出てこなかった学校集団という存在が意味を持ってくる。現在までのことは学校集団によって、その学校のタイプに応じての適応的な意識が形成され、現在から先のことは仲間/おとなという他者によって、その学校タイプに応じての適応的な意識が形成されるようになる。

ここで、上に述べたことを都市/地方という地域別に考察することで、その特徴をより明確にとらえてみたい。

都市では、中学生、高校生においては、その「将来」にあたる仕事や働き方の多様性をという地域特性ともかかわった、他者による一貫した社会化システムが存在する。そこでは、中学校や高校という学校集団の意味は大きくはなく、社会化においてそれは、後で示す地方ほどの意味を持たない。また、その他者による社会化システムでは、「家族・親族」は現在の社会化の主体であり、中学生と高校生をともに、学校生活に適應させるように働く。一方、「(友人等の) 関係の強い他者」による予期的社会化では、その形成される意識は中学生と高校生では異なる。前者ではコンサマトリー的な職業意識を持つようになり、後者は従来の、いわゆる近代的な職業意識を持つようになるのだが、その違いは、仕事や働き方の多様性があるからこそ、「(友人等の) 関係の強い他者」の機能が成長にあわせて変化することによって生じるものと考えられる。

これらからわかるように、都市では、学校集団の社会化における役割は小さく、他者のはたす役割が大きい。そしてその他者は、都市の多様性という地域特性との関係において、「意識形成」における大きな資源となるのである。

地方では、中学生の時は、自覚的ライフコースの出発点ともいえる10歳の時からまだ間がないためか、都市との違いは目立つほどのものではない。「家族・親族」は、都市と同じように現在の社会化の主体であり、学校生活に適應させるという機能をはたす。「(友人等の) 関係の強い他者」は、都市のそれほどには明確ではないが、予期的な社会化の主体であることには違いはない。それが高校になると、都市の高校生とは社会化の様相が大きく違ってくる。地方では、仕事・働き方の多様性が少ないためか、高校生になると、学校タイプにあったそれぞれのトラックにあてはめようと、他者も学校集団も総動員したかのような力が働く。つまり、将来の多様性が少ないところで、他者と学校集団が協調して、ある意味、学校タイプによって定まった道に高校生を進ませようとするのである。

これらからわかるように、地方では、高校になるとその社会化は都市とは様相が異なり、他者だけでなく学校集団も社会化においてはたす役割が大きくなる。そしてその両者は、多様性の少なさによる少ないコースに高校生を進ませようとするためか、「意志決定」や「行動決定」の資

源となるのである。

2節でもふれたが、ライフコース研究では、年をへてから振り返る時の子ども期や青年期においては、時代性はこれまでかなり大きな要因とされてきた。だが、若者にとってのライフコースでは、時代性というものは、その中であって吸収しきれていないもののように思われる。またそれだけでなく、昨今は、時代が細分化され、大きな物語がなかなか成立しない状況でもあり、多くの人に共有できる時代性は存在しにくくなったとも考えられる。それらにより、中学生・高校生にとって、時代性は不明確で意識しにくいもののように思われる。けれども、時代性の次に大きなレベルでの外部的要因とできる地域特性は、上記した本研究での知見から、ライフコースに影響を与える要因として明確に存在しうると考えられる。地域特性は、他者や学校集団を通して、中学生・高校生という存在や、中学・高校時代という期間において、その社会化に関して大きな影響を与えていることが、本研究によって明らかになったのである。それは、別のいい方をすれば、中学生・高校生は都市/地方という地域特性にあったそれぞれの社会化がされている、ということになるだろう。

ところで、本研究の目的は、中学生と高校生を、その前後との関係を含めて、社会化という観点から社会的に位置づけることである。そこで、上で述べた「知見の全体的まとめ」から、中学生・高校生という存在を社会的に位置づけてみたい。

3節1項では自覚的ライフコースを生き始める10歳をひとつの分岐点としたが、それに続く次の分岐点は、大学や専門学校への進学や就職に直面する高校卒業時（18歳）だろう。2つの分岐点の間に存在する本研究の対象は、移行期として注目をあびるポスト青年期の、前段階として位置する。それは、時間的に前段階であるという意味だけではなく、社会的にも前段階にあたるという意味も含まれる。つまり、ポスト青年期における移行の前に、その前段階として、学校への「定着」、つまり「現在の社会化」と、移行後のひとつのかたちである働き方・仕事についての「準備」、つまり「予期的な社会化」をしている時期と考えられるのである。そして、本研究を通してみてきたように、この時期にどのような地域特性の中で育ったかということは、それから先の移行においても少なからぬ影響を与えるようになると思われる。

最後に、今後の展望を述べておきたい。今後は、本研究の対象である中学生・高校生の後となるポスト青年期とより一体感や連続性を持った研究を行い、さらに長いスパンでの青年期の社会化やライフコースについての考察を行いたい。それを行うことにより、今、話題となることの多い、フリーターやニート等のポスト青年期の課題についての、これまでとは違った分析視角が得られるようになるかもしれない。そして、さらにその先に、現代社会における「おとなになること」についての社会的考察を目指したいと思う。

注

- 1) 例えば、玄田（2001）、佐藤（2000）、山田（1999）等。
- 2) 樋田他編（2000）は地方の高校を対象とした時点比較（1979年と1997年）、尾嶋編（2001）は都市の高校を対象とした時点比較（1981年と1997年）であるが、どちらにおいてもその地域特性をふまえての議論はあまりされていない。
- 3) ライフコース研究の代表的なものとしては、伝統的な農村共同体からアメリカやヨーロッパの都市へ移住したポーランド農民の人生について研究したW・I・タマスとF・ズナニエッキの『ヨーロッパとアメリカにおけるポーランド農民』（1918-1920）、1930年代アメリカの大恐慌下の家族と個人のライフコースの発達について扱ったエルダー『大恐慌の子どもたち』（1974）、日本人の中年期にお

ける「成熟」の問題を扱ったD・ブラス『日本人の生き方』(1980)等をあげることができるだろう。また、わが国のものとしては、森岡清美『決死の世代と遺書』(1989)、正岡寛司他編『昭和期を生きた人々:大都市編』(1990)、『昭和期を生きた人々:地方都市編』(1991)、今田幸子・平田周一『サラリーマンの昇進構造』(1995)、小林多寿子『物語られる人生』(1997)等をあげることができるだろう。

- 4) この調査において、クラス単位あるいは学校単位でネットワーク質問項目への回答をこぼされた場合もあり、その人数310人を差し引くと全数は2087人となる。その上で、個人として回答をしなかった生徒が460人おり、結果として「重要なことを話し合った人」を1人以上あげた生徒は1623人(男子808人、女子815人)であった。そのうち、「話し合った人」を「1人あげた生徒」は287人(男子165人、女子122人)、「2人あげた生徒」は421人(男子223人、女子198人)、「3人あげた生徒」は905人(男子410人、女子495人)であった。

文 献

安藤由美, 2003, 『現代社会におけるライフコース』日本放送出版協会。

Bandura, Albert, 1995, "Exercise of personal and collective efficacy in changing societies", Albert Bandura (ed.), *Self Efficacy in Changing Societies*, Cambridge University Press.

Burt, R.S., 1984, "Network Item and General Social Survey", *Social Networks*, 6.

Clausen, J.A., 1986, *The Life Course: A Sociological Perspective*, Prentice-Hall (=1987, 佐藤慶幸・小島茂訳『ライフコースの社会学』早稲田大学出版部)

Clausen, J.A., 1991, "Adolescent competence and the shaping of the life course", *American Journal of Sociology*, 96-4.

Elder, Glen H. Jr., 1974, *Children of the Great Depression*, University of Chicago Press (=1986, 本田時雄他訳『大恐慌の子どもたち』明石書店)。

Erikson, Erik, 1950, *Childhood and Society*, Norton and Company (=1974, 仁科弥生訳『幼児期と社会』1・2みすず書房)。

玄田有史, 2001, 『仕事の中の曖昧な不安』中央公論新社。

樋田大二郎・耳塚寛明・岩木秀夫・荻谷剛彦編著, 2000, 『高校生文化と進路形成の変容』学事出版。

今田幸子・平田周一, 1995, 『サラリーマンの昇進構造』日本労働力研究機構。

小林多寿子, 1997, 『物語られる人生』学陽書房。

工藤保則, 1998, 「子どもの関係性の変化にかんする一考察—10歳前後の遊びを手がかりにして」『ソシオロジ』43-1。

———, 2001, 「高校生の相談ネットワーク—準抛人・準抛集団・社会化」尾嶋史章編著『現代高校生の計量社会学—進路・生活・世代』ミネルヴァ書房。

———・阿形健司・山根真理, 2004, 「地域性とライフコース展望」『仁愛大学研究紀要』2。

———, 2005, 「中学生の持つネットワークの構造とその社会化における機能」『仁愛大学研究紀要』3。

———, 2006, 「地方の高校のトラッキングに関する一考察」『ソシオロジ』51-1

Levinson, Daniel J., 1978, *The Seasons of a Man's Life*, Alfred Knorh (=1980, 南博訳『人生の四季』講談社)。

正岡寛司他編, 1990, 『昭和期を生きた人々:大都市編』早稲田大学人間総合研究センター。

———他編, 1991, 『昭和期を生きた人々:地方都市編』早稲田大学人間総合研究センター。

森岡清美, 1989, 『決死の世代と遺書』吉川弘文館。

———・塩原 勉・本間康平編集代表, 1993, 『新社会学辞典』有斐閣

尾嶋史章編, 2001, 『現代高校生の計量社会学』ミネルヴァ書房。

Plath, W. David, 1980, *Long Engagements*, Stanford University Press (=1985, 井上俊他訳『日本人の生き方』岩波書店)。

佐藤俊樹, 2000, 『不平等社会日本』中央公論新社(中公新書)。

Thomas, W.I. & Znaniecki, F., 1918-1920, *The Polish Peasant in Europe and America*, vols.1-5, Octagon.

- 山田昌弘, 1999, 『パラサイトシングル時代』 筑摩書房 (ちくま新書).
安田 雪, 1997, 『ネットワーク分析—何が行為を決定するか』 新曜社.

付記 本稿は「平成18年度仁愛大学共同研究」の研究成果の一部である.